

龍谷大学佛教文化研究所新報

第37号

◇研究ノート1

龍谷大学図書館蔵存覚著

『選擇註解鈔』について

川添 泰信

法然（一一三三―一二二二）によつて開顯された専修念仏を標榜する浄土宗は、聖人没後多くの門弟によつて宗派・学派が形成され継承されていった。その過程において門弟のなかでは、法然の浄土教思想を明らかにした主著である『選択本願念仏集』（以下、『選択集』と略称）の書写と出版、さらには解説書が執筆されてきた。このような法然浄土教の展開に關しては、親鸞を祖とする真宗においても、親鸞自らが主著『顕浄土真実教行証文類』（以下、『教行信証』と略称）「化巻」の後序に『選択集』の書写を許されたことを明かしている（『真聖全』二卷二〇二頁）。そして真宗の展開において『選択集』のもっとも基本的な理解を見ること

ができるのが、本願寺第三世覚如（一二二七―一三五一）の子、存覚（一二九〇―一三七三）の撰である『選擇註解鈔』（以下、『註解鈔』と略称）である。この『註解鈔』は存覚の『選択集』理解を明らかにすることのみならず、初期真宗における法然浄土教の理解がいかなるものであったのか、についても知ることができるものである。さらには法然門下における『選択集』理解の比較を通じて、各門弟の具体的な日本における浄土教の理解を説明することができる。

『註解鈔』はその書名が示しているように『選択集』の註釈書である。『存覚一期記』に、

四十九歳應永三月、於備後国府守護

前、与法花宗対決之了、御門弟依望申、忌其憚、改名字号悟一出対了、法花衆屈、仍当方弥繁昌、其次作決智抄了、仮名報恩記・至道抄略一選擇註解鈔五等也、顯名抄者、明光於京都所望之間

（『真宗史料集成』一卷八七五頁）

とあるように、本書は存覚四十九歳の時に制作された著作として知られ、暦応元年（一二三三）に備後へ下向した折に成立したものである。存覚が備後へ招かれたのは、『法華問答』が大きな目的であったと推察される。また、備後山南（現広島県福山市沼隈町）の光照寺の慶願（明尊）の請いによつて作られたものである。真宗史上において『教行信証』の註釈書の嚆矢が『六要鈔』であったように、『選択集』の註釈書もまた存覚に端を発する。

『註解鈔』については、江戸期の聖教目録等にも

①一雄『真宗正依典籍集』（一六二四年成立）

選擇註解鈔五卷 同所光照寺慶願明尊所望（『真宗全』七四卷、八頁）

②慧空『選擇集叢林記』内『選擇集抄記目録』（二六九三年成立）

暦応元年夏作選擇註解鈔五帖、常楽台一期記ニアリ、与行観抄同年也、滅後百二十六年（『真宗全』一七巻、五五三頁）

③知空『真宗録外聖教目録』存覚法師作条（成立年不明）

選擇註解鈔（『真宗全』七四卷、一一頁）

④玄智『浄土真宗教典誌』巻一（二七七八年成立）

選擇集註解鈔五巻 常楽台存覚上人、応山南光照寺慶願請草之、寛文二年梓行

（『真宗全』七四巻、二〇四頁）

等のように、その名が見られるものの、今日では現存する古写本の数や、それらの内容の異同および関係性など、書誌的な面からの研究はほとんど見ることができない。そこで、本論では先行研究および現存する古写本についてそれらの特徴および関係性について考えてみたい。

『註解鈔』の古写本について複数の諸本を挙げて最初に論じたのは鷲尾教導氏である。鷲尾氏は、『註解鈔』の撰述者が存覚であることについて、古来より異議がないとし本派本願寺所蔵の三種の古写本について紹介している。

（イ）イソシマ本 第一・第四・第五巻の三冊

（第五巻奥書）

此一部五帖当寺開山存覚上人／御述作也雖為一流之秘本懇望／之間書与釈賢意処也／寛正四歳癸八月晦日記之／釈明覚花押乱世已後イソシマ彦太郎寄進之ス

（ロ）顯惠本 第三巻の一冊

（ハ）応永本 第一・第二・第三・第四・第五巻の五冊

〈第一巻 奥書〉

本嘉慶三年己卯月六日書寫了／応永二十二年五月二十九日以二本書之先老／御草隨尋得令之忝謹以寫之／一交了伝領□（花押）／記之

〈第二巻 奥書〉

本康応元年己卯七月十一日早朝書寫了／此本以賢□本寫之故存覺上人御／草也仍悦尋出感得此本間加書寫了／応永廿二年六月七日寫功了／松下隠土／一校了□（花押）／初條立寫置本以以外文言点等無□之間以或／本令尚交合之処則其謬多之悉改寫了

〈第三巻 奥書〉

本康応元年己卯三月十二日／此本大谷□門借用 書寫之先老御草／依難有寫之 一交了／応永廿年六月十四日□（花押）／最初寫本難得其意合点等有之／仍先老令加点□本感得之間不絶感／悦寫而校合了註訖以之可為龜鑑

〈第四巻 奥書〉

奥云応永廿三歳以賢忍本書寫之／愚昧□□（花押）

〈第五巻 奥書〉

奥云応永廿二年以大谷□門書寫之来合了／竹隱々士／□（花押）（は改行）

このうち、（イ）については、二冊を失っているが「イソシマ本」という名称は

三冊すべてに「イソシマ彦太郎寄進」とあることから名付けられたもので、第五巻の奥書から寛正四年（一四六三）明覚書写本としている。次に（ロ）については、「これは第三の一冊のみにして表紙下部に釈願惠の三字ある外跋更になし」ということから常楽寺第九世願惠の所持本であるとしている。さらに（ハ）については、（イ）や（ロ）とは異なる奥書がすべての巻に記された五巻揃いの完本である。書写年時は五巻すべてに明記されているが、それぞれ別時に

第三巻（応永二十年六月十四日）

第一巻（応永二十二年五月二十九日）

第二巻（応永二十二年六月七日）

第五巻（応永二十二年）

第四巻（応永二十三年）

の順で応永二十年～二十三年（一四一三～一四一六）の間に書写されたことが知られる。しかも、書写するに際して元になった原本については、大谷本・賢忍本の二本の名前が挙がつており、巻によって異なった原本に依つて書写していると思われることができる。また、奥書に出る「陰士」の号から筆者を「常楽寺系の人の伝写」と仮定して考察されているが、原本の状態からは筆者名が判読し難く、その他の検討材料も乏しいことから断定するには至っていない。以上のように鷺尾氏により、本派本願寺所蔵の三種の古写本は、いづれも室町時代に書写されたもので、それぞれに異なった特徴があること

が紹介され、とくに応永本については存覚の没年からわずか四十年後に書写された古写本であることが知られるのである。これら「註解鈔」の古写本の存在は、その内容を検討するにあたって極めて重要であることは言うまでもないが、次に今日の現存状況について確認しておきたい。「古写古本真宗聖教現存目録」（以下、『現存目録』と略称）によれば、現存が確認されている「註解鈔」の古写本で室町時代までに書写されたものは以下の六本である。

（A）京都府龍谷大学蔵 室町初期

書写本 五巻五冊

（B）京都府龍谷大学蔵 室町末期

書写本 五巻五冊

（C）大阪府光徳寺蔵 室町時代

書写本 五巻五冊

（D）大阪府光徳寺蔵 室町初期

書写本 第四巻一冊（残欠）

（E）京都府常楽寺蔵 室町末期

書写本 四巻四冊

（F）滋賀県福田寺蔵 室町末期

書写本 五巻五冊

ここでまず注目すべきは、鷺尾氏が紹介した本派本願寺所蔵の三種の古写本の『註解鈔』は挙げられていないという点である。そこで、その所在が問題になるのだが、右記の（A）龍谷大学所蔵室町初期書写本について見ていくと、そこには鷺尾氏が紹介した三種の古写本と非常に近似した書誌情報が見ることが

わかる。『現存目録』によって（A）の奥書を示せば以下の通りである。

〈第一巻〉

本嘉慶三年己卯月六日書寫了／応永廿二年五月廿九日以或本書之先老／御草隨尋得令校之忝謹以寫之／伝領玄有（花押）

〈第二巻〉

本康応元年己卯七月十一日早朝書寫了／此本以賢意本寫之故存覺上人御／草也依□尋出感得此本間加書寫了／応永廿二年六月七日寫功了 松下隠土玄有（花押）／一校了／初条二寫置本以置本以外文言点等無元之間以或／本可有交合之処則其謬多之悉改寫了

〈第四巻〉

乱世以後イソシマ教太郎寄進之矣

〈第五巻〉

此一部五帖当寺開山存覺上人／御述作也雖為一流之秘本懇望／之間書与釈賢意也／寛正四歳未八月晦日記之／釈明覚（花押）／乱世以後イソシマ教太郎寄進之矣

この内容は、原本の状態により判読不可とした点（□と表示）や「彦太郎」を「教太郎」と判読した点など小異はあるものの、基本的には鷺尾氏が紹介した（イ）と（ハ）とのそれぞれの奥書とは同じである。また、第三巻については、『現存

目録」に記載されている備考の項目に

「第三巻表紙に釈願恵とあり」とあって、

表紙に「釈願恵」と示されている点、さ

らに奥書がないという点で(ロ)と一致

している。すなわち、(A)が有する奥書

などの書誌の内容は先に見てきた(イ)

(ロ)(ハ)の古写本それぞれが有してい

た特徴と一致しており、第一巻・第二巻

が(ハ)、第三巻が(ロ)、第四巻・第五

巻が(イ)によって五巻を成している

と見ることができるのである。このこと

については、おそらく鷲尾氏が紹介して

いた時点では本派本願寺に所蔵されて

三種の「註解鈔」が何らかの事情で混

合されて取交本と成り、今日では龍谷大

学に所蔵されていると考えるのが妥当で

あらうと思われる。すなわち、鷲尾氏

が紹介された三種の古写本は今日では一

種に集約されているということである。こ

れによって、今日、現存する「註解鈔」

の古写本は、「現存目録」の記述のとおり

なくとも六本を確認することができ

る。また、年紀が明記されている最古

の古写本は(A)であり、存覚の自筆本

は今日でも発見されておらず、書写年

時の上限は室町時代の初期を遡らない

ことになる。

【註解鈔】の思想内容としては、全五

巻二一項目より成り、重要な文章の解

釈を述べて要義を通釈している。また、

所々に問答を設けてその奥旨を明らかに

している。各項目を「註解鈔」に基づ

て述べれば左記のようになる。

第一巻(三七項目)

題目、題下の四字(二項目)

第一 教相章(二五項目)

第二 正雜二行章(十項目)

第二巻(四九項目)

第三 本願章(一九項目)

第四 三輩章(五項目)

第五 利益章(七項目)

第六 特留念仏章(十項目)

第七 撰取章(八項目)

第三巻(三八項目)

第八 三心章(三八項目)

第四巻(六二項目)

第九 四修章(八項目)

第一〇 化讃章(七項目)

第一一 讃嘆章(一九項目)

第二二 念仏付属章(二八項目)

第五巻(二五項目)

第二三 多善根章(三項目)

第二四 証誠章(三項目)

第二五 護念章(七項目)

第二六 名号付属章(二一項目)

総結、後序(一項目)

また各章を「浄土三部経」に基づいて、

左記のように分類している。

一、「仏説無量寿経」に関連する段

(「真聖全」五巻一五〇頁)

「第三 本願章」、「第四 三輩章」、

「第五 利益章」、「第六 特留念仏章」

二、「仏説観無量寿経」に関連する段

(同二六四頁)

「第七 撰取章」、「第八 三心章」、

「第九 四修章」、「第一〇 化讃章」、

「第一一 讃嘆章」、「第二二 念仏付

属章」

三、「仏説阿彌陀経」に関連する段(同

二二八頁)

「第二三 多善根章」、「第二四 証誠

章」、「第二五 護念章」、「第二六

名号付属章」

すなわち「第一 教相章」、「第二 正

雜二行章」については何ら分類を施して

いないのである。そして「総結」と言わ

れる「三選の文」には左記のように釈し

ている。

速かに生死を離れんと欲せば、二種

の勝法の中に、且らく聖道門を開き

て、選びて浄土門に入れ(教相章の

釈)

浄土門に入らんと欲はば、正雜二行

の中に、名を称すれば必ず生ずること

を得、佛の本願に依るが故に(正

雜二行章の釈)

さらに「第三 本願章」の釈について、

この二行のなかに選擇するところの

正宗の念仏をもて、第三の本願の章

の法体とし

(「真聖全」五巻二二九頁)

と正雜二行から選擇された正定業である

称名念仏こそが、「第三 本願章」の法体

であるとし、続いて、

その一法にをの／＼種々の利益にし

たがへ、一々の功德につきて、しも

の諸門をひらくなり。(同)

と、「第三 本願章」以下の章は正定業で

ある称名念仏における種々の利益・功德

について説くにすぎないとしているので

ある。

ところで、「選取集」の研究史において、

「選取集」の中心はどの章になるのかと言

うことが議論されてきた。それは1、二

行章が中心である説として「選取集決疑

鈔」(良忠)、「選取集講義」(深助)、さら

に2、本願章が中心である説として「選

取集決疑鈔見聞」(持阿)、「選取集私記」

(行観)、「選取集通津録」(慧雲)、さらに

3、第二、三章が中心である説として

「選取集叢林記」(慧空)、「選取集昨非鈔」

(了詳)、「選取集戊寅記」(僧朗)、「選取

集水月記」(円月)という理解があった。

【註解鈔】では、

十六の章段の中には、この章正宗な

り、「選擇本願念仏集」と云へる題

目、此章の意、此章の意を顕はすが

故なり。余の所談は皆此章を助成す

るなり。

(「真聖全」五巻一五〇頁)

と示すように、「第三 本願章」が「選取

集」の正しく宗致であり、「選取集」とい

う題号も本章の義を顕すためであると述

べられるので、以下、「第三 本願章」に

ついて見ていくこととする。まずその冒

頭において、

今の章には其の正行の中に、正業の

念仏を以て弥陀の本願とし、往生の

正業とする義を顯すなり。(同)

と、正行の中の正定業である称名念仏こそが阿弥陀仏の本願に誓われた行であり、正しく浄土への往生行であることを述べる。本願章の随文解釈の中で、重要だと思われるのは、

是の如く往生の行種々不同にして具さに述べべからず。即ち今は前の不施・持戒乃至孝養父母等の諸行を選び捨てて、専称仏号を選び取る。故に選擇と云ふ也。

〔真聖全〕五卷一五四頁

についての解釈であらう。この文について、

正く選擇本願の義顯也。されば弥陀の本願は専称仏号也、専称名仏号の外は往生の正因に非ず。此義を成ずるを此集の所詮とする也。(同)

と解釈している。すなわちこの『選択集』の文こそが選擇本願の義であるとし、阿弥陀仏の本願は称名念仏が往生の正因であり、その他の行は往生の正因ではないとしているのである。そしてこの義こそが、『選択集』の表すところであると述べるのである。

さらに本章には、『仏説無量壽經』に説かれる第十八願とその成就文を次のように解釈している。すなわち、

「十方衆生」と云は、善人悪人・有智無智・有罪無罪・男女・老少、一切有情を攝する言也。「至心信樂欲生」と云は三信なり、『觀經』に説

くところの三心則是也。所謂至心は至誠心、是真実心なり。信樂は深心、これ深信の心也。欲生は廻向發願心、これ願往生の心なり。「乃至十念」と云は行体を顯はす。名号を称する事上一形を尽し下十念にいたるまで、みな往生の因なり。(同一五〇一―一五一頁)

「諸有衆生」と云は十方衆生なり。「聞其名号」と云は南無阿弥陀仏を聞也。「信心」と云は至心也。「歡喜」と云は信樂也。「乃至一念」と云は、乃至十念の願なほ一念に至極する事を顯はす也。「至心回向」と云は、如来他力の回向なり。「願生彼国」と云は欲生の心なり。此三信を發すれば、如来他力の回向に依て即往生を得と云也。(同一五六頁)

である。ここで説かれる事について、まず第十八願文の解釈は「乃至十念」が往生の因であることを述べる以外、随文解釈にとどまっているといえよう。それに對して成就文では、十方衆生が「南無阿弥陀仏」の名号を聞き、至心・信樂・欲生の三心を發して乃至一念すれば、阿弥陀仏の利他の回向によって往生を得ることができるとする。すなわち正しく先の文で阿弥陀仏の本願(第十八願)には称名念仏一行が往生の正因であることを明確に表した上で、この第十八願成就文では、衆生が称名念仏と三心を發するならば如来廻向より往生することができると

しているのである。それは次の一文をもつても明確である。

因願にはかくのごとく十念と説たるを、願成就文には「乃至一念」と説けり。是易行の中の易行を顯はすことば也。…(中略)…されば往生の爲には又別の因なし、至心・信樂・欲生の心を以て乃至一念せん者、皆悉往生すべし。

〔真聖全〕五卷一五一頁

ただし、言うまでもなく「第三 本願章」では他にも重要なことが多く述べられている。すなわちいわゆる総別二願・

選擇撰取・難易勝劣・念声は一などであるが、『註解鈔』では、その部分について全く触れられていないのである。そこには存覚の『選択集』に対する問題意識が如何にあったかという事が浮かび上がってくると思われるのである。

なお本論は、『龍谷大学仏教文化研究所紀要』第五二集所載の「指定研究『選擇註解鈔』の研究」をベースにしたものであるが、現今では研究途上のものであり、詳細については、今後、共同研究の成果として発表を予定するものである。

◇ 研究概要報告 ◇

平成二十五(二〇一三)年度本研究所の研究計画は、指定研究二件(継続二)、常設研究三件(継続三)、特別指定研究三件(継続三)、共同研究四件(継続二、新規二)、そして個人研究一件(新規二)が設置され、合計十三件の研究プロジェクトが構成された。次に示すような具体的な計画のもと、総研究員数二三三名の協力によって推進される。

本研究所は研究事業として、仏教文化講演会を七月十一日に第八十回(「法滅」からの再生―東大寺再建における西行を中心に―)を、また十一月二十八日に第八十一回「真宗におけるカウンスリングプロセス―生きる喜びの成就―」を開催している。研究成果として『佛教文化研究所紀要』第五十二集に共同研究他の報告論文八編の他、仏教文化講演会の講演記録を収めた。善本叢書としては、『中世歌書集』(責任編集者 大取一馬氏)、また仏教文化研究叢書としては『戒律を知るための小辞典』(責任編集者 浅田正博氏)、『対人援助をめぐる実践と考察』(責任編集者 吉川悟氏)が出版された。これらは、永年の研究成果によるものである。